

# 石巻 大川小学校 竹の灯籠 108本にあかり 祈りささげる

2024-3-11 NHK



震災で多くの児童などが犠牲になった石巻市の大川小学校では、遺族などが手作りした竹の灯籠にあかりがともされ、祈りがささげられました。

石巻市の大川小学校では、13年前の震災で児童と教職員あわせて84人が犠牲になりました。

竹の灯籠にあかりをともし取り組みは、児童の遺族などが鎮魂と震災の風化を防ぎたいという願いを込めて、おととしから行って、竹灯籠づくりには県内外から多くの方が参加しました。

11日は、校舎近くの広場に当時学校に在籍していた児童の数と同じ108本の竹の灯籠が円形状に並べられ、午後5時45分ごろ、灯籠の中に通されたLEDが点灯されると、竹にあけられた穴から光が漏れて幻想的な雰囲気になりました。

集まった人たちは、竹の光を眺めながら震災に思いを寄せているようでした。

大川小学校で当時6年生だった長男を亡くした今野浩行さんは「きのう、きょうもあしたも子どもを思う気持ちはずっと変わりません。助けられなかった後悔や謝罪の気持ちは死ぬまで変わりません。完成した竹あかりの光を見ると子どもたちのもとに届いているだろうなと思います」と話していました。

今回のプロジェクトの共同代表を務め、大川小学校で当時6年生だった3男を亡くした佐藤和隆さんは「13年がたち、息子が帰ってこないという現実を考えることが多くなります。元日の能登半島地震は13年前の自分たちの体験と重なって苦しいです。竹あかりを通して必ず起きる自然災害にたくさんの方が向き合うきっかけになればと思います」と話していました。

石巻市の大川小学校は、海からおよそ4キロの北上川沿いにあります。

13年前の東日本大震災の際、子どもらは地震の発生からおよそ50分間、学校の指示のもと校庭に待機しました。

そして、学校は裏山ではなく標高7メートルあまりの「三角地帯」と呼ばれる橋のもとに避難を始めますが、直後に高さ8メートルを超える津波に襲われたとみられ、児童74人と教職員10人が犠牲になりました。

津波の爪痕が残る校舎は、保存するか、解体するか、遺族などを交えた議論が進められ、石巻市は、慰霊と追悼、そして教訓を後世に伝えるため、校舎とその周辺を震災遺構として整備し、2021年7月から一般公開を始めました。

敷地内には伝承施設を設け、当時の避難の経緯の説明や震災前、緑に囲まれた学校周辺の姿を示したパネル、それに子どもたちが使っていた一輪車などを展示しています。

児童の遺族の一部などは事実と向き合い災害への備えにして欲しいと語り部活動を行っているほか、鎮魂と震災の風化を防ぎたいという願いを込めて3月11日に竹の灯籠にあかりをともして祈りをささげる取り組みを震災の発生から10年たった3年前から行っています。